



詩とメルヘン絵本館開館25周年記念 特別企画 イラストレーター 内田新哉 インタビュー

詩とメルヘン絵本館開館 25 周年・雑誌『詩とメルヘン』創刊 50 周年を記念して、4 号に分けて詩人・朗読家の詩村あかねさんと、イラストレーターの内田新哉さんに、インタビューと詩とイラストの特別かき下ろしを寄稿していただく特別企画。

第3弾となる今号は、イラストレーターの内田新哉さんに『詩とメルヘン』に関するインタビューを行いました。

Q.『詩とメルヘン』との出会いについて

旅をしながら描いたスケッチの作品展をした後、みなさんからほしいと言われて絵が手元に残らなかったんです。その話を友人にしたら「本に残すといい」とイラストの投稿雑誌をいくつか教えてもらったんです。そのリストの一番上にあったのが『詩とメルヘン』でした。

ハガキで応募して賞をもらった人がデビューできる雑誌とは知らず、いきなり編集部に絵を送ったんですが、しばらくして編集者の小林さんから「ある企画を進めている」という連絡をいただきまして、掲載されたのが詩人・青木景子さんの特集号（1989年1月号）でした。大好きなイラストレーターさんたちの絵と一緒に載っていたのでびっくりして喜んだことを覚えています。

Q.やなせたかし名誉館長との思い出

最初に出席した授賞式で、やなせ先生が受賞者に向けて「今日から君は、私のライバルです」と話されていたのが印象的です。また、星屑忘年会では「絵を描く人は星屑ぐらいいるが、残れる人は一握り。消えていかないようにね」というお話をされていました。その時、プロの世界は厳しいんだと。無名有名は関係なく、ページを開いた時にため息をついてもらえるような作品を描き続けたいと感じました。

また、作家同士で会う機会がほとんどない中で、やなせ先生はよくパーティーを開いてくれました。作家はナイーブで孤独な人が多いから、繋がりを持たせてくれたのは、やなせ先生の大きな愛だったんだと思います。

Q.『詩とメルヘン』のイラストレーターとして印象深いこと

室内にソファが置いてある絵を掲載してもらった時に、40代の息子さんと70代のお父さんの親子から手紙が届きました。そこには「不治の病で入院し、普段はしかめっ面で過ごしている父が、『詩とメルヘン』に載っていた内田さんの絵をおだやかな表情で眺めていた」という内容が書かれ、お父さんからのお礼の手紙も添えられていました。それを読んだときに涙が止まらなくて。親子の絆や、息子さんの優しさが胸に染みてきて、絵を描いていてよかったと思いました。この世の中はビジネスの世界ではあるけれど、そうじゃない部分もしっかりあって、そういう部分を支えていかなければいけないのが絵描きであって詩人である。『詩とメルヘン』には、人間が忘れてはいけない大切なものがあつたと思います。

Q.最近のお仕事や今後の活動について

春にフランス、ドイツ、フィンランドなど海外での取材を予定。また、京都、名古屋、東京などでの個展、美術館でのワークショップ、神社の絵馬、少年院での指導、アールブリュット、各種講演会、ボランティアなどを予定しています。

内田新哉さんが描いた香美市香北町の風景画



「ホテル橋〜ヒーローのふる里〜」 アンパンマン「あ。ら。かると展」(2006年) 出展作品

内田新哉さんの『詩とメルヘン』デビュー作



『詩とメルヘン』1989年1月号

【やなせたかし評】

内田新哉氏は絶えず世界中を旅している。線はペンに水彩という素朴な手法だが画家の眼が暖かくて一木一草に生命が宿っている。

内田ファンには若い女性が多い。それは多分内田新哉氏の人柄に魅力を感じるからだと思う。絵と同じく地球上にこんないい人がいたのかと思うような好青年である。(展覧会『三人の風景-内田新哉&大西秀美・雨宮尚子-』(2002年)より)



内田新哉 プロフィール

絵を描いたり、旅をしたり、静かに暮らしています。
小さな幸せがあれば良いと思います。
公式サイト <https://uchida-shinya.net>
Instagramアカウント u.shinya1